

かみやまだかいづか

● 上山田貝塚 (国指定史跡)

昭和57年3月29日 指定

上山田貝塚は、かほく市上山田の通称和田集落の背後に広がる通称館山（東西約250m、南北約80m、標高約20m）にあります。かほく市指江の開業医であった久保清氏によって、昭和5年（1930年）に発見されました。貝塚は、北貝塚と南貝塚の2ヶ所からなります。

久保氏は、医学生の頃より貝塚に関心を持ち、開業後、「河北潟を臨む丘陵縁辺のどこかに貝塚が存在するにちがない」との推測から聞き取り調査を実施し、昭和5年（1930年）11月、館山の土取跡において貝殻と土器片を発見し貝塚であることを確認しました。それが、上山田貝塚の北貝塚です。その後の丹念な踏査によって、新たに南貝塚（貝層の厚さ約2m）を発見し、昭和6年（1931年）3月～4月にかけて発掘調査（第1次調査）を実施しました。その際、人体装飾付筒形土製品（通称：母子像）が出土しました。

昭和25年、東京大学人類学教室の山内清男氏によって、上山田貝塚出土の土器をもって上山田式という標式土器が設定され、昭和20年代後半の同氏による調査研究によって、北陸における縄文時代の土器の変化を示す基準資料として位置づけられました。上山田式土器は、北陸の縄文時代中期中葉の標式土器（基準資料）です。

昭和35年、久保氏が副会長を務める石川考古学研究会の協力によって、第2次調査が実施されました。

その後、上山田貝塚の国史跡指定による現状保存を進めるため、昭和50年～51年にかけて第3次・第4次調査が実施され、北貝塚の状況や台地上の状況が調査され、昭和57年3月29日、国の指定史跡となりました。

上山田貝塚は、石川県で初めて発見された貝塚として、そして北陸の縄文時代中期中葉を示す基準資料を出土した標式遺跡として、貴重な遺跡です。

貝塚とは・・・昔の人々が食用にした貝の殻やその他の動物・植物の残骸、廃棄した土器や石器などが堆積した場所ですが、貝塚中から人を埋葬した跡など、他の用途に使用した痕跡が見つかる場合もあり、単純に今日のゴミ捨て場的場所という考え方でみることはできないようです。



◆ 上山田貝塚から出土した貝殻や動物の骨の種類

【貝殻や魚の骨】

淡水産の貝 イシガイ、タニシ類、シジミなど
海水産の貝 アサリ、ハマグリ、カキなど
魚の骨 クロダイ、マダイ、スズキ、コイ、フナなど

【その他の動物の骨】

アシカ、クジラ、サメ、ウミガメ
シカ、イノシシ、ウサギ、キツネ、タヌキなど

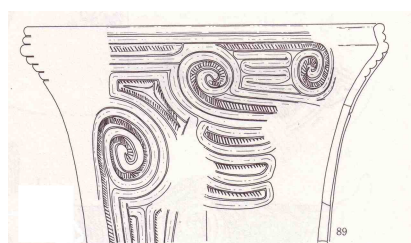
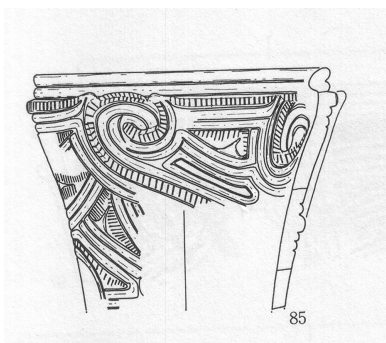


<左> 体装飾付筒形土製品

（じんたいそうしよくつきつつがたどせいひん）

石川県指定文化財)

人体装飾付筒形土製品は、「母親が幼児を背負ったように見える」と表現されたことから、通称「母子像」と呼ばれているもので、昭和61年3月22日に石川県の指定文化財となりました。（石川県立歴史博物館にて展示されています。）



【上山田貝塚出土土器の実測図】